

# 被災地支援活動を通して育成された社会人基礎力（1）

－準備から当日の支援活動の展開－

長谷川 えり子、菅瀬 君子、瀧本 幸子、高柳 友美  
愛知学泉短期大学

## Fundamental Competencies for Working Persons Developed Through Volunteer Activities in Disaster Stricken Areas(1)

－Development From Preparations to Support Activities－

Eriko Hasegawa, Kimiko Sugase, Sachiko Takimoto, Tomomi Takayanagi

キーワード：被災地支援 Disaster Stricken Areas、ボランティア Volunteer  
社会人基礎力 Fundamental Competencies for Working

### 1. はじめに

本学生活デザイン総合学科はライフスタイルを自らデザインし、地域・社会に貢献できる社会人の育成を目指している。そこで、日本の社会で起きた大災害の現状を知り、学生たちに今後の生き方を考える契機にしたいと考え、被災地支援活動を計画した。また、チームでの活動を通して、チームワークの大切さを学び、学生一人ひとりが成長してほしい思い、ゼミ活動の一環として取り組んだ。

本学の母体である学校法人安城学園は、2011年3月の東日本大震災発生後から、様々な支援活動を学園上げて実施している。2013年度には、愛知学泉短期大学同窓会が、「東日本から学ぶ研修会」を企画したので、ファッションビジネスを学ぶ長谷川ゼミ、ビジネス情報を学ぶ菅瀬ゼミの学生が参加し、2つのゼミ合同で被災地支援活動を展開することになった。

本報では、被災地支援に向けて、短大生が主体的に計画し、様々な準備を行ってきた内容、および支援活動当日の内容についてまとめた。さらには、社会人基礎力育成支援プログラム<sup>1)</sup>の一環として取り組んできたので、その効果を

検証するためにアンケート調査を実施し、結果から得られた教育効果、育成結果について報告する。

### 2. 方法

#### （1）対象

本学生活デザイン総合学科に在籍し、ファッションビジネスを専攻する長谷川ゼミ（15名）、ビジネス情報を専攻する菅瀬ゼミ（15名）を対象とした。各ゼミの1年間の活動内容を表1、2に示した。

2013年度は従来のゼミ活動（表1、2）に加えて被災地支援活動に取り組んだ。

表1. ゼミナール活動の概要（長谷川ゼミ）

目標：ファッションを通して人間力を養う

内容	・ファッショントレンド分析 ・アクセサリ制作、ショップ出店 ・アクセサリ講座の実施 ・ファッションコスチューム制作 ・ファッションショー開催
----	--

#### （2）支援活動の概要

ジャンルの異なる2つのゼミが合同で実施することになったため、事前に何度も話し合いを

表2.ゼミナール活動の概要（菅瀬ゼミ）

目標：情報スキルの向上と人間力の育成
内容・日本語ワープロ、文書デザイン、プレゼンテーション作成検定試験チャレンジ
・MOS検定チャレンジ
・「親子パソコン教室」実施
・地域交流活動の実施

持ち、統一した活動テーマと目標、活動先を決定した。

- ・活動テーマ：「笑顔の花を咲かせよう！」
- ・活動目標：①被災地の今を知る  
②短大で学んだスキルを活かす  
③みんなで温かい思いを共有する
- ・活動先：宮城県気仙沼地区高齢者施設、および保育所

### （3）アンケート調査

今回の支援活動は、学生に学ぶ意欲を喚起させ、獲得した知識や技術を活用して、社会人としての資質を意識化させることにより、社会人基礎力の育成を目指した。そこで、学生たちの取組みに対する意識変化に着目し、アンケート調査を実施した。調査対象は、参加学生とし、活動開始から5回にわたって、同じ内容で経時調査を行った。

## 3. 結果

### （1）準備活動結果

ゼミナールの授業は2年次4月からの開講であるが、8月の支援活動に向けて、3月から開始した。東北での限られた時間を有効に活用するために準備活動として、表3の内容を計画し、実施した。

今回の活動対象を生活弱者である高齢者、幼児としたため、活動先を保育所、および高齢者施設に設定し、各ゼミの特徴を活かした活動内容を検討した。その結果、それぞれのゼミ学生が自分たちのスキルを考え、表4の活動内容を設定した。

長谷川ゼミは、アクセサリー制作のスキルを応用し、幼児には未来に向かってキラッと輝いて

表3. 準備活動の実施概要

実施月	内 容
3月	東北研修参加説明会
5月	地域交流活動「花のとう」参加 被災地のDVD視聴 活動内容検討
6月	準備活動（各ゼミ）
7月	準備活動（各ゼミ） 子どもアクセサリー講座実施 地域交流活動「たつみがおこなつまつり」参加
8月	支援活動全体オリエンテーション 幼児講習会参加 高齢者講習会参加 ゼミ合同親睦会

表4. 支援活動の内容

	長谷川ゼミ	菅瀬ゼミ
幼児	ラインストーンのキーホルダー作り	パネルシアター ランチョンマット作り
高齢者	アロママッサージによるハンドケア	ランチョンマット作り

ほしいという想いでラインストーンを使ったキーホルダー（写真1）作りを考えた。高齢者には、手先が不自由な方が多いと想定し、心と身体を癒しながら対話を中心にした交流がしたいと考え、授業で習ったアロママッサージの施術を行うことにした。

菅瀬ゼミは、パソコン操作のスキルを活かし、自分たちがパソコンで制作したたくさんのマスコットを利用したランチョンマット（写真2）作りを考えた。食卓を少しでも華やかに楽しいひと時にしてほしいという想いが込められている。ランチョンマット作りは、幼児も高齢者も両方可能であると考えたため、同じ内容での活動を行うことにした。

両ゼミの学生たちは、活動の際に幼児と上手く接することができるように、事前に子供との関わり方を地域活動や講習会を通して実践経験を積



写真 1.キーホルダー



写真 2.ランチョンマット



写真 3.アクセサリ講座参加の様子



写真 4.たつみがおこなつまつり参加の様子

んだ。その様子を写真 3,4 に示した。

さらには、本学の幼児教育担当教員と介護福祉担当教員に、講習会を依頼して、子供との関わり方、高齢者との関わり方について学ぶ機会を企画した。講習会を通して、世代を超えた方々と上手くコミュニケーションをはかる方法を実践的に学習することができ、学生たちは今まで不安要素であった幼児や高齢者との関わり方について少し自信を持つことができたようであった。

## （2）支援活動（保育所）

今回の活動先は、それぞれのゼミで異なり、長谷川ゼミは気仙沼市立松岩保育所、菅瀬ゼミは気仙沼市立新月保育所にて展開した。

長谷川ゼミは、年長園児 14 名と 1 対 1 でキ

ーホルダー作りを行った。自己紹介のあと、ペアワークに入り、園児と対話しながら一緒に制作に取り組んだ。会話の中で、園児が学生たちへ地震や津波の心配を問いかけてくれ、被災して傷ついているのにも関わらず、温かい配慮に胸が痛んだ学生もいたようであった。保育所の園庭のすぐ下まで津波が押し寄せ、当日はみんなで裏山に駆け登ったという話を園長先生から聞き、小さい子供たちがとても大変な体験をしたという事実を目の当たりにして、学生たちは衝撃を受けたようであった。活動を通して、笑顔いっぱい園児たちから、たくさんの刺激を受け、逆に元気をもらったという学生が多かった。松岩保育所での活動の様子を写真 5 に示した。



写真 5.松岩保育所での活動（長谷川ゼミ）

菅瀬ゼミは、年長園児 16 名を対象にランチョンマット作りを行った。まずは、かわいいお面をつけてパネルシアター形式で説明することで、園児たちに興味を与え、制作意欲を引出し、親近感を持たせた。園児と対話しながら制作を進める中で、でき上がったマットはお母さんにプレゼントしたい、先生にあげたいという園児の素直な気持ちを受けて、家族や周りの人との「絆」の深さを実感した。新月保育所での活動の様子を写真 6 に示した。

両ゼミともに、短い時間の滞在であったが、園児と楽しく交流ができ、お別れの時には、見えなくなるまで何度も手を振って、別れを惜しんだ姿が印象的であった。事前に地域の子供たちと関わりを持ち、計画的に準備を進めてきたので、スムーズに活動が展開できた。



伝いをしながら制作活動を行った。準備の段階では、手の不自由な方がいるという事まで想定できず、当日そのことを知り、学生たちがレイアウトを提案しながら一緒に制作した。不測の事態でも一人ひとりが状況を把握し自分たちの考えで対処する行動特性が見られた。活動の様子を写真7に示した。



写真6. 新月保育所での活動（菅瀬ゼミ）

### （3）支援活動（高齢者施設）

高齢者施設での活動は、両ゼミ合同で行った。本学と関わりのある気仙沼市特別養護老人ホーム恵潮苑を訪問し、長谷川ゼミはアロママッサージ、菅瀬ゼミはランチョンマット制作を展開した。学生たちは、高齢者の状態に合わせて対応し、自ら進んで声掛けをしたり、高齢者に代わって制作したりする中で主体性が育まれたようであった。事前に講習会で高齢者との関わり方を学習してきた事が役立ったようであった。



アロママッサージの施術では、対話をしながら進めたので、たくさんの会話が弾み、震災当時の様子のお話が心が打たれたようであった。心を込めてハンドケアをすることで、大変喜んでいただき、気持ちを通い合わせる事ができた。ランチョンマット作りは、たくさんの絵柄をパズルのように思い思いに配置し、高齢者のお手

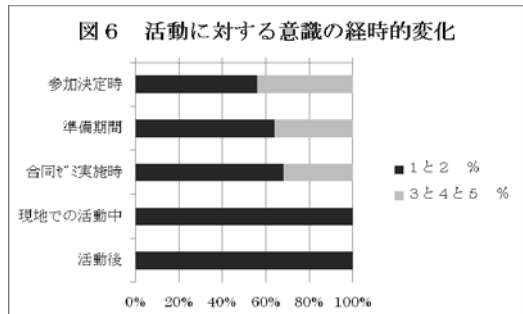
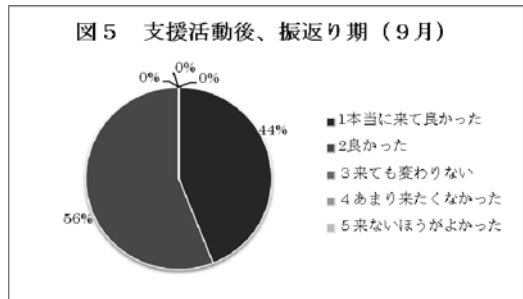
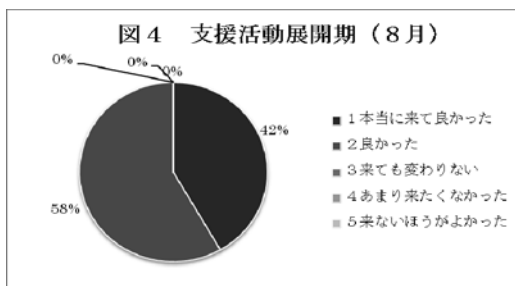
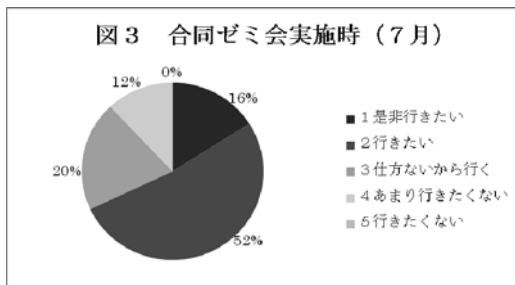
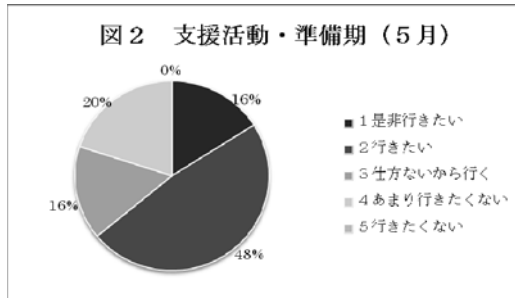
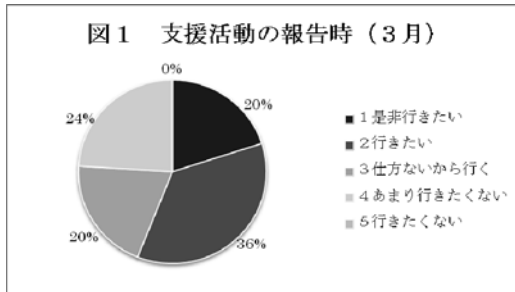


写真7. 恵潮苑での活動（合同ゼミ）

活動の終盤には、岡崎から持参したお菓子を一緒に会食し、その後全員で施設の歌と踊りで心が通い合い、総勢 80 名の気持ちが一つになった。高齢者からは、涙ながらに感謝の気持ちを何度も伝えられ、施設内には、たくさんの笑顔があちらこちらに溢れ、学生たちは達成感でいっぱいであった。

#### （4）活動による意識変化

学生たちの活動に対する意識について、活動開始時から経時的にアンケート調査を行った結果をグラフに示した。



東北支援活動が決定し、ゼミの一環で参加する事を学生に伝えた時は、44%の学生が参加に対してあまり前向きではなかった。その理由としては、費用がかかる、夏休みがつぶれてしまうなど、自己都合の回答が見られた。しかし、支援活動に向かっていく過程で、地域での子供と触れ合う活動や準備を進める中で意欲がだんだんと高まっていき、徐々に活動に対する思いが前向きになっていったことが意識調査で判明した。

さらには、支援活動展開期（8月）と支援活動後（9月）の調査では、参加者全員が、「本当に来て良かった」、「良かった」という回答結果を示した。実際に現地での活動を通して、一人ひとりが多くの事を吸収して、自分自身が成長したという実感が得られたこと、被災地支援の意義を自ら考える機会に直面したことが結果に繋がったと推測される。

次にアンケートに記入された学生の感想の一部を以下に抜粋した。

#### — 活動後の感想 —

- ・ 忘れかけていた震災を思い出すことができ、本当に大きな災害であったことがよくわかった。
- ・ 心のどこかで他人事のように感じていたが、現地に行き、自分の事のように感じる事ができた。

- ・命の大切さ、人との関わりを前よりも考えるようになった。
- ・被災者の頑張っている姿を見たことで、自分ももっと頑張らなくてはいけないと思った。
- ・2年半が経過しているのに復興が進んでいない現状がよくわかった。
- ・実際に被災地の現状を見て、聴いて、感じて、今までの自分の考えが変わった。
- ・人の気持ちを前より考えられるようになった。
- ・普段の生活が当たり前ではなく、幸せなことだと実感して、感謝するようになった。
- ・被災者の人達にさらにできることはないかと思うようになった。
- ・時が経過しても絶対に忘れてはいけないことだと思った。

学生たちの感想は様々で、教員側が考えていた以上に実に多くの事を感じ取ってくれた。個人の活動では、被災者を支援するところまで実現するには、様々な課題があり大変であるが、チームとして取り組むことで、お互いに刺激合いながら、協力でき、みんなで共感することで相乗効果が生まれ、大きな成果が表れたと思われる。

#### 4. まとめ

今回の活動を通して、学生たちは大震災を経験した辛い立場であっても、明るく前向きに生きている被災者の姿に感動し、活動経過の中で、教育成果として以下の事が得られた。

- 1) 準備過程では、失敗ができない現地での活動を想定して、主体的に子供たちと上手く接する経験を積んだり、自己技術のスキルアップを目指す事で活動への意識が高まった。
- 2) 保育所では、明るい園児たちと関わる中で、自分たちが東北の子供たちのためにもっとたくさんさんの支援をしてあげたいと強く感じた学生が多く、支援活動の意義を理解できた。
- 3) 高齢者施設では、世代を超えたコミュニケーションを図ることができ、活動の終盤には80人の心が一つになることで、絆の大切さを深く実感した。
- 4) 支援活動を通して、多くの人に喜びを与え、

多くの人と心を通い合わせることで、学生たちの意識が大きく変化し、それぞれに精神的な成長が見られた。

今回の取り組みは、チームワークを通して行った学習実践により、個々の主体性や責任感が身に付き、それぞれに課題発見力や状況把握力などの社会人基礎力の育成がおおいにはかられた。

また、支援活動を通して、本学の建学の精神である「真心」「努力」「奉仕」「感謝」の4大精神の実践に繋がり、有効的な学習効果を上げることができた。

本研究の一部は、2014年(一社)日本家政学会年次大会にて研究発表を行った。

#### 謝 辞

今回の被災地支援活動を実施するにあたり、愛知学泉短期大学同窓会、気仙沼市立松岩保育所、気仙沼市立新月保育所、気仙沼市恵潮苑の皆様方、安城学園高校坂田成夫校長、愛知学泉短期大学稲垣みかげ教授、木村典子准教授に温かいご支援をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 学校法人安城学園社会人基礎力育成室編：無限の可能性への道，p2-p14 (2012)

#### 参考文献

- ・経済産業省編：社会人基礎力育成の手引きー日本の将来を託す若者を育てるためにー，朝日新聞出版 (2010)
- ・石川順一著：週末は東北へー災害ボランティアブッカー，平凡社 (2011)
- ・杉浦大悟著：21人の輪ー震災を生きる子どもたちの日々ー，NHK出版 (2012)
- ・山口昭男著：3.11を心に刻んで，岩波書店 (2012)
- ・溝口明秀著：明日へ東日本大震災命の記録，NHK出版 (2011)